

大坂三郷の氏神さんと夏祭り

近江晴子

1. 江戸時代の大坂の町—大坂三郷

大坂三郷といいますが、江戸時代の大坂の町のことを指します。北郷・南郷・天満郷の三つの郷、あるいは北組・南組・天満組と呼ばれることの方が多のですが、その三つの行政区画から形成されていたので大坂三郷と称されました*。

江戸時代の大坂の町—大坂三郷—の範囲ですが、図1の地図が明治36年3月25日に発行されました「第五回内国勸業博覧会観覧必携〈大阪全図〉」ですが、だいたいこの地図に掲載されている中心部と考えていただければいいと思います。この地図の下の方に描かれております難波、天王寺のあたりは、難波村、天王寺村でしたし、地図の上の方、天満の北は、川崎村、北野村、曾根崎村となって、大坂三郷には含まれません。ですから、現在の中央区と、北区の南半分くらいと西区の東半分くらいの範囲が江戸時代の大坂の町でした。

ここで、「増脩改正摂州大阪地図」を使って、大坂三郷についてご説明したいと思います(図2、図3)。この地図は文化3年(1806)に出ました大阪の地図ですが、江戸時代に発行されました大阪の地図の中で一番大きな範囲を取り上げております大判の地図で、記述が正確とされていますのでよく使われる地図です。この題字の「増脩改正摂州大阪地図」の大阪は阜偏の「阪」をつかっております。

この地図では、大坂三郷のうち、天満組に属する町には白三角(△)印がついています。北組に属する町には、黒丸(●)、南組に属する町には黒三角(▲)がついています。天満組は大川一堂島川以北で、北組との境界ははっきりしていますが、北組と南組の境はちょっと入り組んでおります。船場の中では、本町と安土町の間を背割り下水を境にして、北側が北組、南側が南組となっております。ただ、南御堂さんの裏手(西側)では、南組のところへ北組が入り込んでいます。船場といいますが、大川—土佐堀川と東横堀川・長堀

川・西横堀川の四つの堀川に囲まれた長方形の土地です。船場の南側の四角形の土地が島之内で、長堀川・東横堀川・道頓堀川・西横堀川に囲まれています。西横堀川から西、現在の西区に入りますと、北組と南組の境界は船場内より少し南にずれています。そして、堀江(北堀江・南堀江)のあたりは、南組・北組・天満組が入り組んでまいります。今度は東横堀川の東側、お城に近い方では、いわゆる上町ですが、北組と南組の境界は、船場の境界が東横堀川を越えて東側に続いており、一部北組の領域へ南組が入り込んでいます。こうして、あちこちで入り込んでいるところがありますが、江戸時代の大坂の町は全体として、北から天満組・北組・南組の三つの組で構成されていきました。ですから、西横堀川は、明治以後に東区と西区を分ける境界の川になったのであって、江戸時代では境界の川ではなかったのです。

幕府の役人が住んでおりましたところは、お城の南側一帯と、天満です。天満には、大坂町奉行配下の与力・同心の屋敷がありました。天満川崎のあたり、現在の造幣局のあたりには、川崎東照宮が祀られていて、お宮の東側と北側に大坂町奉行与力の屋敷がありました。また、天満寺町の北側にも大坂町奉行与力・同心の屋敷がありました。これら、幕府役人の居住地は大坂三郷には含まれません。また、寺と神社の土地も大坂三郷には含まれず、大坂三郷はあくまで町人の住んでいる地域でした。

大坂三郷の北組・南組・天満組には、それぞれ惣会所が設けられておまして、それぞれの惣会所の下には各町に町会所が設けられております。大坂町奉行所からの通達は惣会所から町々の町会所へ伝達されます。このようにきっちりと行政の仕組みが出来上がっておりますので、東西両町奉行所の与力・同心、わずか200人たらずのお役人で、江戸時代の大坂の町、幕末期の町数は約620町あったといいますが、その大坂三郷を取り仕切っていたわけです。

2. 大坂三郷の氏神さん

ここで再び図1の「第五回内国勸業博覧会観覧

*大阪は、江戸時代では大坂と書かれることが多く、明治に入って大阪と改められましたが、本稿では大阪に統一しました(大坂三郷、大坂町奉行などは省く)。

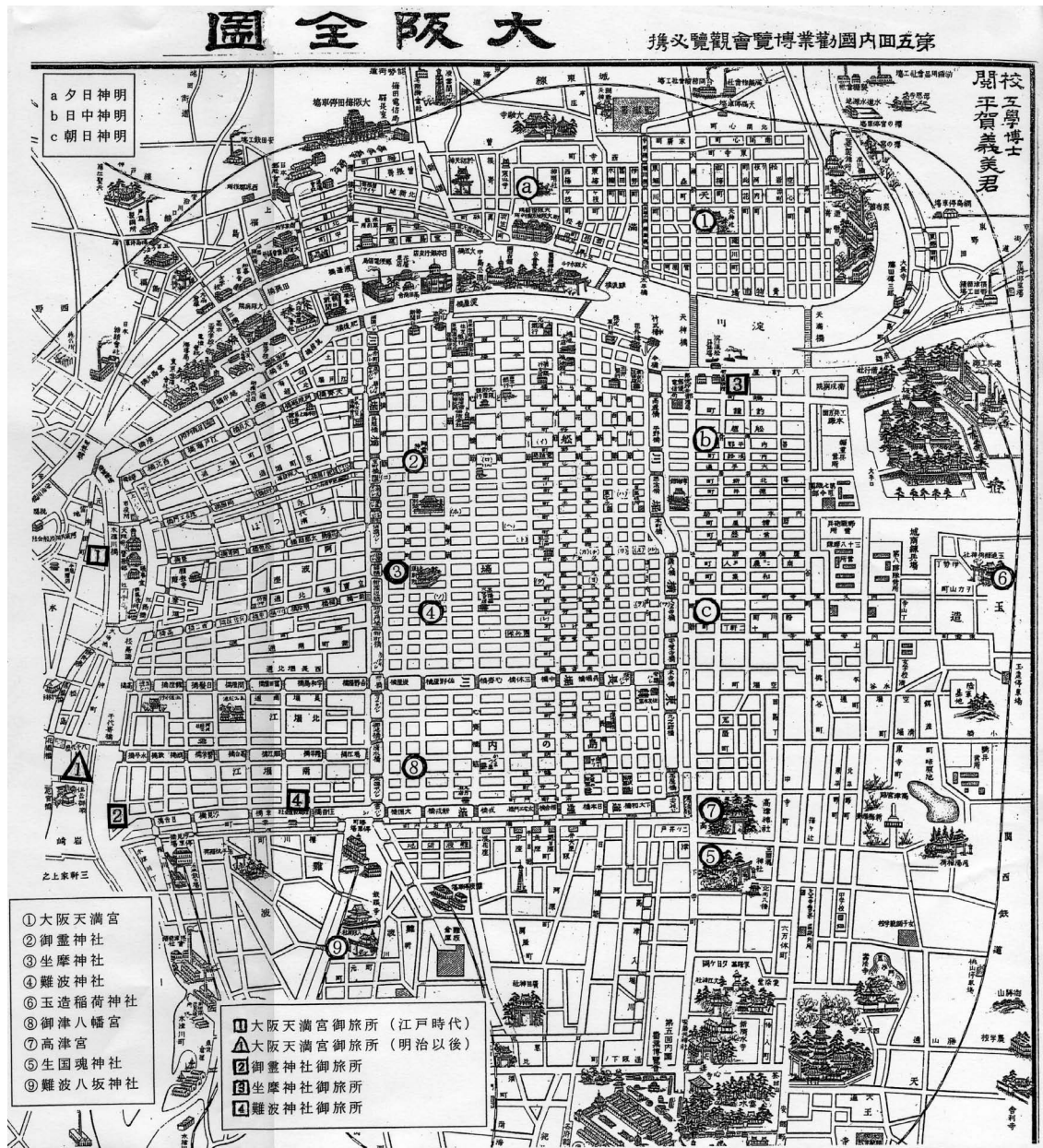


図1：第五回内国勸業博覧会観覧必携〈大阪全図〉（大阪天満宮蔵）

必携「大阪全図」をご覧ください。この地図は明治36年に大阪で第5回内国勸業博覧会が開催されたときに発行された、会場案内図の裏面に印刷された大阪の地図です。表側には、博覧会場の建物の案内図が出ております。ちょうど1970年の大阪万博や1990年の花博のときに、たくさんの会場案内図が発行されて、私もはそれを手にして見物に出かけましたね。それと同じものでして、裏側にこの大阪全図がありました。非常に面白い地図で、建物がみなイラストでちゃんと書いてあります。勸業博覧会の会場は、地図の一番下、一心寺の西隣に描かれております。

現在、旧大阪三郷内に氏神さんは9神社あります。地図の上に①から⑨までの番号で示しているのが、氏神さんです。①が天満の天神さん（大阪天満宮）、②③④が船場の中の氏神さんで、北から②御霊さん（御霊神社）、③坐摩さん（坐摩神社）④難波神社の3神社です。それから島之内には⑧御津八幡さん（御津宮・御津八幡宮）がございます。それからお城の南に⑥玉造稻荷さん（玉造稻荷神社）がございます。それから⑦高津さん（高津宮）ですね。この⑦高津宮は大坂三郷の端っこに位置しています。もちろん高津宮の土地は大坂三郷外になりますが、⑤生玉さん（生國魂神社・

生玉神社)と⑨難波八阪神社は大坂三郷の外に位置していますが、氏地を大坂三郷内に持っておられますので、ここで取り上げています。これら9社の神社は江戸時代から場所は変わらず現在ももとの場所に鎮座しておられます。これらの神社の他に大正13年に鶴町(現大正区)に移転された平野町神明宮(日中神明)について『撰陽奇観』に内平野町、船越町、内淡路町ほか数町を氏地としてあげていますので、大坂三郷内の氏神さんは10神社あったことになります。

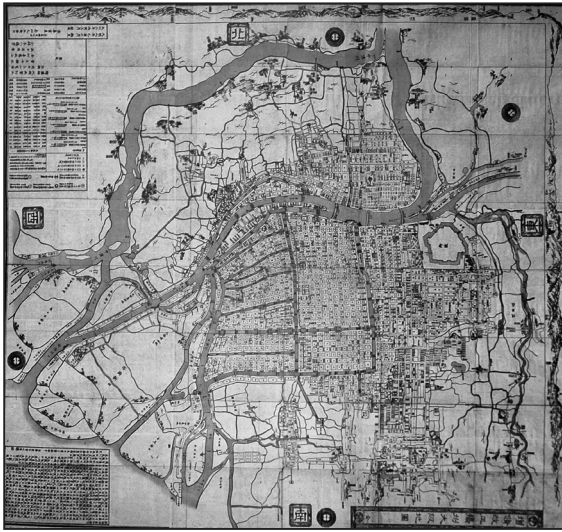


図2：増脩改正摂州大阪地図
(『近畿の市街古図』鹿島出版会)

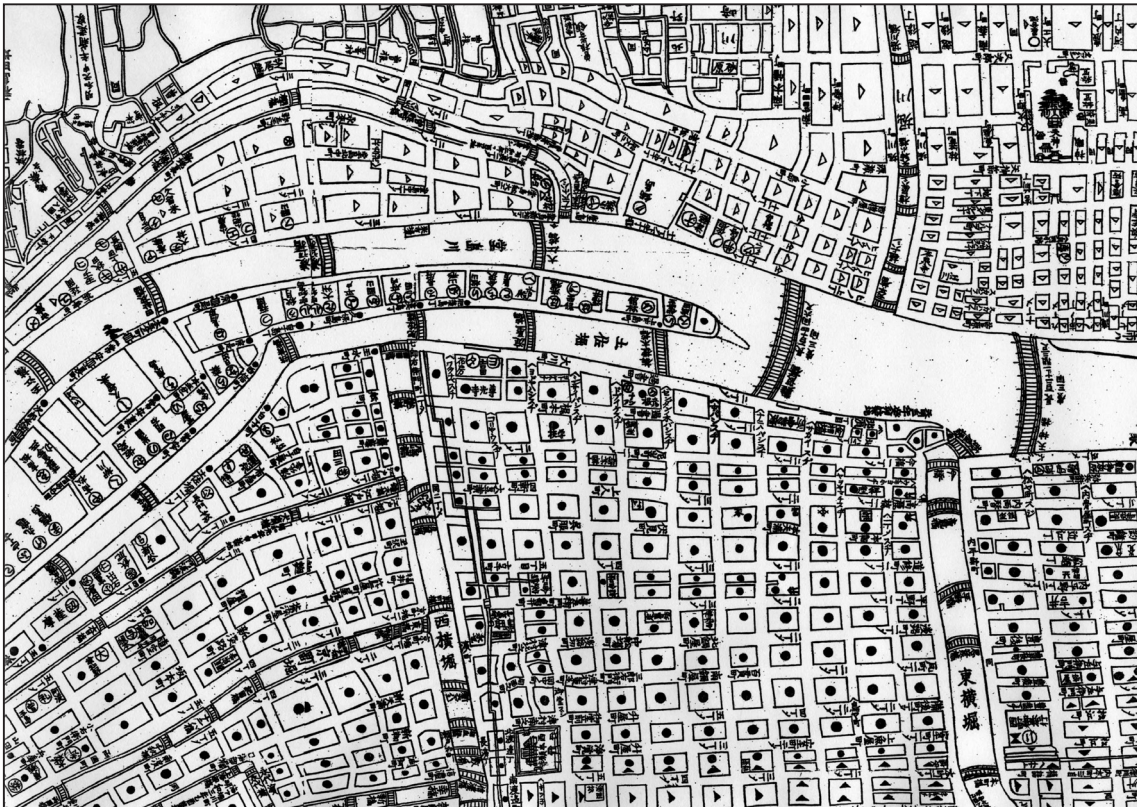


図3：増脩改正摂州大阪地図 (部分拡大)

図4の「明治以降大阪の氏地区分」図は、昭和59年に私が大阪天満宮文化研究所へ参るようになってから、3年目の昭和62年に大学の後輩で、地理学専攻の糸井洋子さんが、修士論文のテーマの一つに「大阪の氏神さんの氏地」をやりたいということで、たずねて来られまして、そのときに糸井さんが作成された氏地区分図です。氏地の史料といいましても、現在氏地の史料が残っている神社は、大阪天満宮のみです。大阪天満宮以外のお宮さんは、すべて昭和20年の空襲で被災され、貴重な史料が失われました。それで糸井さんは、『東区史』、『西区史』などの各区史や『大阪府全志』などのわずかな記述をつなぎ合わせて氏地区分図を作成されたようです。明治以降大阪の9神社の氏地区分がひと目で見る事が出来て、すぐれた地図だと思います。

⑤の生國魂神社は上町ほとんどを氏地にしていらっしゃる。といひますのは、生國魂神社さんはもともと、上町台地北端の難波宮跡のあたりに鎮座しておられたのですが、秀吉が大坂城築城の際に現在地に移転させたわけですね。その前に蓮如が大坂本願寺を築きますが、「天文日記」などに御坊に近接して生玉社があったということが出てきます。

ここで、大坂三郷の氏神さんの夏祭礼日を見ておきましょう（図5）。江戸時代は旧暦6月の13・14日の難波八坂神社から27・28日の生國魂神社まで、ほぼ毎日夏祭りが続きます。祭礼が無い日は19・23・26日の3日間だけです。江戸時代は6月が大阪の祭り月だったわけです。これらの夏祭礼日は、明治5年12月から太陽暦が採用されたので、やがて6月のお祭りを7月に1ヶ月ずらすことになって、明治以後現在まで、7月が大阪の祭り月となっています。天神祭の祭礼日を1ヶ月ずらすことになっていく経過を、大阪天満宮所蔵「大阪天満宮文書」の「公庁諸願届書写」「当番所雑記」などから年表にして載せてあります（図6）。この年表によりますと、太陽暦になった明治6年

から10年まで、この間は、毎年その年の旧暦6月24・25日は新暦ではいつにあたるのかと、新暦にあてはめて決めておりますので、毎年お祭りの日が変わっておりますね。明治11年からは単純にひと月飛ばして、7月24・25日を夏祭礼日としております。大阪天満宮以外のお宮さんにつきましては、史料が残っておりませんので分かりませんが、おそらく、大阪天満宮の場合と似たような状況と考えると、ほぼ同時期に他神社も祭礼日をひと月ずらされるようになったのだと思います。

また、現在、夏祭礼日を変更しておられるお宮さんが2、3社ございます。生國魂神社さんでは、明治に入ってから、7月8・9日が夏祭礼日となったようです。現在では、7月11・12日が夏祭礼日です。御霊神社さんでは、船場のビジネス街の真ん中ですから、まわりにお住まいの人が極端に少なくなってしまうと、7月16・17日の祭礼日が土日にあたりますとなかなかお詣りに来れないということになりますので、その場合は、ウィークデイに変更しておられます。そういう風みなさんえらい苦心していらっしゃいます。

ここで、9神社のなかでただ1社、空襲を免れて貴重な江戸時代の史料を今に伝えておられる大阪

①大阪天満宮	旧暦6月24日、25日
②御霊神社	旧暦6月16日、17日
③坐摩神社	旧暦6月21日、22日
④難波神社	旧暦6月20日、21日
⑤生國魂神社	旧暦6月27日、28日
⑥玉造稻荷神社	旧暦6月15日、16日
⑦高津宮	旧暦6月17日、18日
⑧御津八幡宮	旧暦6月14日、15日
⑨難波八坂神社	旧暦6月13日、14日

図5：大坂三郷の氏神さんの夏祭礼日

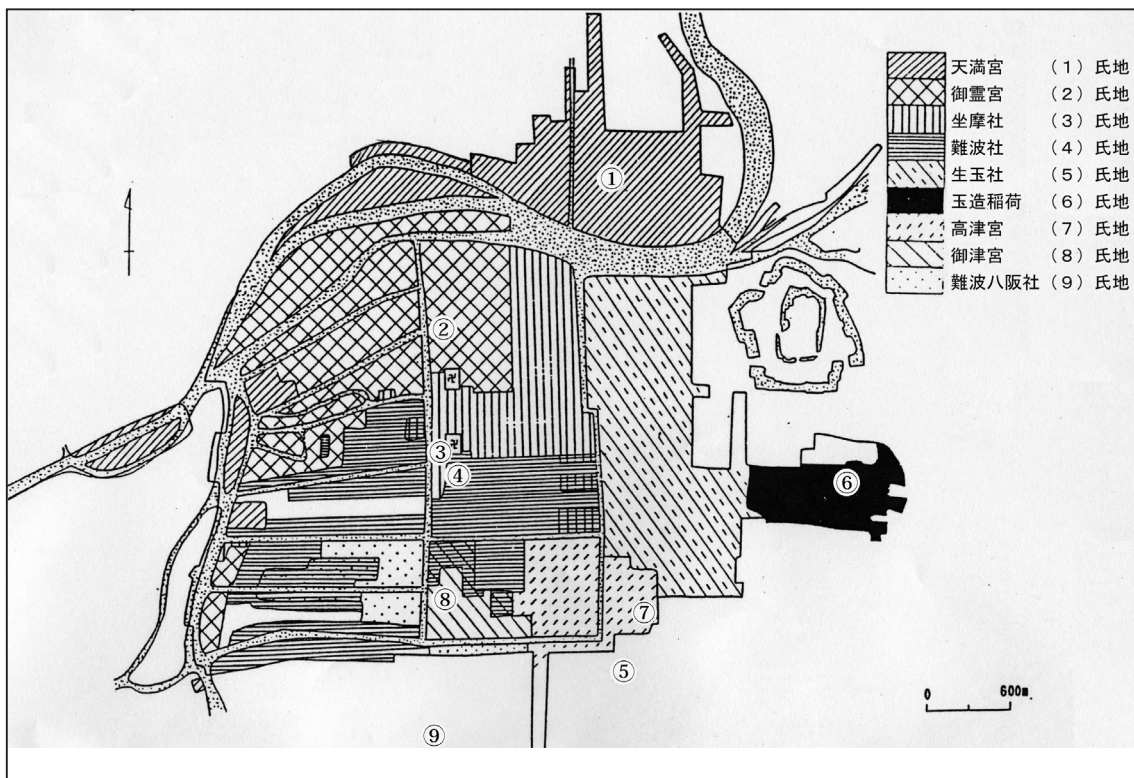


図4：明治以降大阪の氏地区分（糸井洋子氏作成）

天満宮のお話を少しさせていただきます。

大阪天満宮は昭和20年の空襲を免れたといいますが、江戸時代には7回も火災に遭ってまいりまして、一番大きい火災は享保9年（1724）3月の妙知焼でした。そのときは大阪の町全体が丸焼けになったような大火災でした。大阪天満宮もやはり被災され、そのため現在大阪天満宮に残っております史料はほとんど享保の大火以後の史料でございます。その妙知焼以後にも何度か火災がありました。とくに天保8年（1837）2月に大塩事件が起こって、大火となり、大阪天満宮は被災しました。このとき、「御文庫」も焼失して、収蔵していた書籍類は焼けてしまいました。せっかく大阪の書籍商のみなさんが奉納してくださった本も、すべてそこで焼いています。現在、大阪天満宮御文庫には貴重な書籍がたくさん収蔵されておりますが、だいたい大塩焼以降に奉納された書籍でございます。大塩焼の際、御文庫は焼けてしまったのですが、現在『大阪天満宮所蔵古文書目録』に分類整理して載せております古文書類は焼失を免れて、残りました。

大阪天満宮の天神祭は、江戸時代は6月24・25日に齋行されておりますが、25日に船渡御（川渡御）が行われます。この6月25日に「長潮」という現象が起こるのです。潮の干満の差が非常に少なくなって、いつも川は滔々と流れ、十分に水をたたえているという風な状態の日なのです。陰暦で、毎月10日と25日は長潮現象が起こるのです。船渡御が行われる堂島川から木津川は、淀川が運んできた土砂が堆積しやすく、水深が浅くなっ

て、渡御船列の航行が妨げられる心配があったのですが、6月25日については、長潮のおかげで、神輿船は安けく還御されるとして、「貰い汐」と言い習わしてきたと『摂津名所図会』（寛政10年刊1798）に記されています。さて、大阪天満宮では長潮のことを知っていて、6月25日を夏祭礼日に選ばれたのかどうかは分かりません。天神祭の一番古い記録は、宝徳元年（1449）中原康富が日記『康富記』に7月7日、七夕さんの日に書いた「川崎之鎮守、天神之祭礼也」という記事です。それから約140年ほど後、天正15年（1587）公家山科言経の日記『言経卿記』には、6月25日、「天神社へ祭礼見物」とあって、天神祭の日が6月25日に変わっています。大阪の川というのはすぐ海に直結しておりますので、大阪湾の満潮・干潮に影響されるのです。私は、戦後西横堀川浜の家で育ちましたので、いつも、川に少し張り出した出窓から川を眺めていたのですけども、普通の川と違って、面白いですね。上げ潮のときと、引き潮のときで、流れの方向が変わったりします。それから大潮の日の満潮のときには水位が上がって、川岸の石垣ぎりぎりまで水がきます。逆に干潮になると、川岸近くは底が見えるぐらいになります。そういう川でした。ですから天神祭でも、昔はしょっちゅう土砂がたまりやすく、大潮の時の干潮になると、船の航行がしにくくなるのです。そういうことですので、川が水をたたえているということが非常に大事なことだったのです。それが偶然なのか長潮の現象が起こる日に船渡御していたわけです。ところが、明治11年以後は新暦

明治4年	6月24・25日	船渡御復活	
5	6月24・25日	〃	12月から太陽暦に
6	7月18・19日	陸渡御	右川筋土砂浚等難行届候二付
7	8月6・7日	〃	
8	7月24・25日	〃	
9	8月13・14日	〃	
10	8月3・4日	〃	
11	7月24・25日	渡御なし	本社営繕中のため
12		渡御なし	コレラ流行のため祭礼当分ノ内延期（府庁布達）
13	7月24・25日	陸渡御	
14	7月24・25日	船渡御復活	
15	7月24・25日	〃	
16	7月24・25日	〃	
17	7月24・25日	〃	
18	8月24・25日	渡御なし	夏祭礼は淀川洪水のため1ヶ月延期
19			夏祭礼延期奏上。コレラ流行のためか
20	7月24・25日	船渡御	

図6：天神祭明治初期祭礼月日（大阪天満宮文書）公庁諸願届書写・当番所雑記他による

の7月25日に船渡御を斎行することになって、その年によってどんな汐の状態にあたるか分からなくなってしまうのです。戦後は、逆に、地盤沈下のために大潮のときなど、船上の御神輿が橋桁に衝突したりして、昭和28年から川上に遡航する船渡御に変更されて今に至っております。

ここで、ちょっと、大阪の三神明さんについて簡単にご説明をしたいと思います。図1の地図に、③夕日神明（難波神明宮）、⑤日中神明（平野町神明宮）、⑥朝日神明（朝日神明宮）の三神明の場所を示しておきました。夕日神明（ゆうひのしんめい）さんは、明治40年に露天神社（つゆのてんじん・お初天神）に合祀されました。それから日中神明（ひなかのしんめい）さんと朝日神明（あさひのしんめい）さんは移転されました。日中神明さんは、明治40年に社号を神明神社と改め、大正13年に鶴町へ移転されました。朝日神明さんは、明治40年に川岸町の皇大神宮に合祀されて朝日神明社となり、昭和6年に此花区春日出に移転されました。この地図は明治36年発行ですから、三神明とも載っていますね。

なぜ、夕日神明さん、朝日神明さん、日中神明さんと呼ばれるようになったか。確かなことは分からないようですが、どうやら社殿の向きが、夕日神明さんは西を向き、日中神明さんは南を向き、朝日神明さんは東を向いているというようなことらしいです。日中神明と朝日神明はちょうど松屋町筋に面して並んでいます。天満の天神さんもずっとその延長上に位置していますね。この松屋町筋あたりが、平安時代の海岸線と言われています。このあたりぐらいまでは、大阪湾が入り込んで来ていたわけですね。ですから京の都から熊野詣に行かれるときに、この地図の天神橋から天満橋あたりの浜に船が着いて、ここから熊野詣の第一歩がはじまるわけですね。ちょうど船が着くあたりに③の印をしてありますが、ここは坐摩神社の御旅所です。石町2丁目にあるのですが、この地図では石町の通りを省略してしまっております。この坐摩神社の御旅所の場所が、もともと坐摩神社があった場所ではないかと推定されております。石町の坐摩神社御旅所の場所と松屋町沿いの日中神明さんの場所を、熊野九十九王子の第一

王子である窪津王子あるいは渡辺王子の場所に比定する説もあります。このあたりから熊野詣がはじまるわけですね。石町の町名の由来はいろいろ説がありますが、一つは摂津国府の地であったためとし、後世石町と書き誤ったとする説です。また、一つは神功皇后が新羅から帰還されたときこの地に到着され、この石に腰をかけて一服されたという伝承があり、石町はその石に因むというものです。現在も坐摩神社御旅所鎮座石が祀られております。松屋町をもう少し南に下がったところに朝日神明さんがありますが、その場所が熊野九十九王子の坂口王子かともいわれております。朝日神明さんは、また逆櫓社と俗称されました。ここにも又伝承がございまして、今年のNHK大河ドラマで源義経と梶原景時の逆櫓論争ができましたが、その舞台がここであるというのです。福島の方にも逆櫓の松というのがありますが、この朝日神明さんにも逆櫓論争の伝承がありました。

3. 船場の氏神さん

御霊神社・坐摩神社・難波神社

船場の中のお宮さん三社、御霊神社・坐摩神社・難波神社、この三神社のお祭りを取りあげてみたいと思います。それについて、私自身の体験を少し交えながらお話しします。大阪船場では、戦前まで、江戸時代以来のお祭りの風景がよく残っていたようです。私は戦後の船場で育きましたので、戦前の華やかな夏祭りを体験することはできなかったのですが、両親や年長の方にいろいろ聞きましたところ、氏神さんのお祭りとなると、町全体がガラッと様子を変えてしまうというわけですね。仕事は全部お休みで、町全体でお祭りをする。どこのお家も表には家紋のついた幔幕を張り、提灯を吊します。たいてい、上が茶色か浅葱色で下が白の二段の幕です。店の間を開け放ってそこに家宝の屏風を立てます。図7、図8に絵がありますが、そこのお家の御寮人さんや嬢ちゃんは晴れ着を着てお客さんの接待をするというふうな。もう町をあげての大騒動になるわけです。男の子のいるところは男の子の数だけ、御神灯と書いた箱提灯を立てます。棹が青貝の飾りの付いた立派なもので、上にすごい飾りのついた

ものだそうで、うちには、ちゃんと跡継ぎがおりまっせということを見せているのでしょうね。

そういう風に、もう町中がお祭り一色になりまして、日常のケの暮らしとは一変するハレの暮らしが、ハレの日がやってくるのですね。とにかく、町の様相がガラッと変わってしまうのは、お正月と夏祭りの年2回なのです。そういう町をあげての楽しいお祭り、大人がもう夢中になるお祭りというのは、それは子供にとったらどんなに楽しいワクワクすることだったでしょう。私は残念ながらそういう体験はできませんでした。ただ戦後、御霊さんも坐摩さんもみんな焼けてしまわれましたので、お祭りも寂しいものになったのですが、道修町の神農さんのお祭りが、ちょっとそういう雰囲気がありましたね。神農さんすくなひこな（少彦名神社）は氏神さんと違いまして、道修町の葉屋さんの神さんですけれど。その道修町全体が町をあげてのお祭りをしていました。それがもっと大きく氏地全体に広がるわけですね。そういうお祭り風景です。

図7、図8に難波神社の蒲団太鼓の図と坐摩神社の車楽（だんじり）の図を載せておきました。両方とも『摂津名所図会』からとりました。『摂津

名所図会』が寛政8年から10年（1796～98）の刊行で、その3、4年後に、大田南畝が大阪へやってきます。大田蜀山人、あの狂歌で有名な方ですが、この方は江戸のお役人です。単身赴任で一年間、享和元年（1801）3月から翌年の3月まで大坂銅座御用を勤めます。53、4歳ぐらいでした。南本町5丁目の宿舎から今橋の銅座へ出勤します。お勤めは朝8時から午後2時まで。その後はフリーになりますので、大阪中見物して歩きまわられるわけですね。それで『蘆の若葉』という日記を残しておられますので、当時の様子が非常によくわかってありがたいんです。その中に船場の3神社、御霊神社、坐摩神社、難波神社の夏祭りの見物記があります。

大田南畝の大阪夏祭り見物記 享和元年(1801)

『蘆の若葉』より

(六月)十七日 晴

御霊の祭みんとて、高麗橋の西のかたなる市店にいれば、ゆきかふ人賑はし。折々何やらんどよみあへるを見るに、頭にいろいろのかつらきて、手に何やらんもち来たりて、さるがふ事いひもてありくは、俄といふものなり

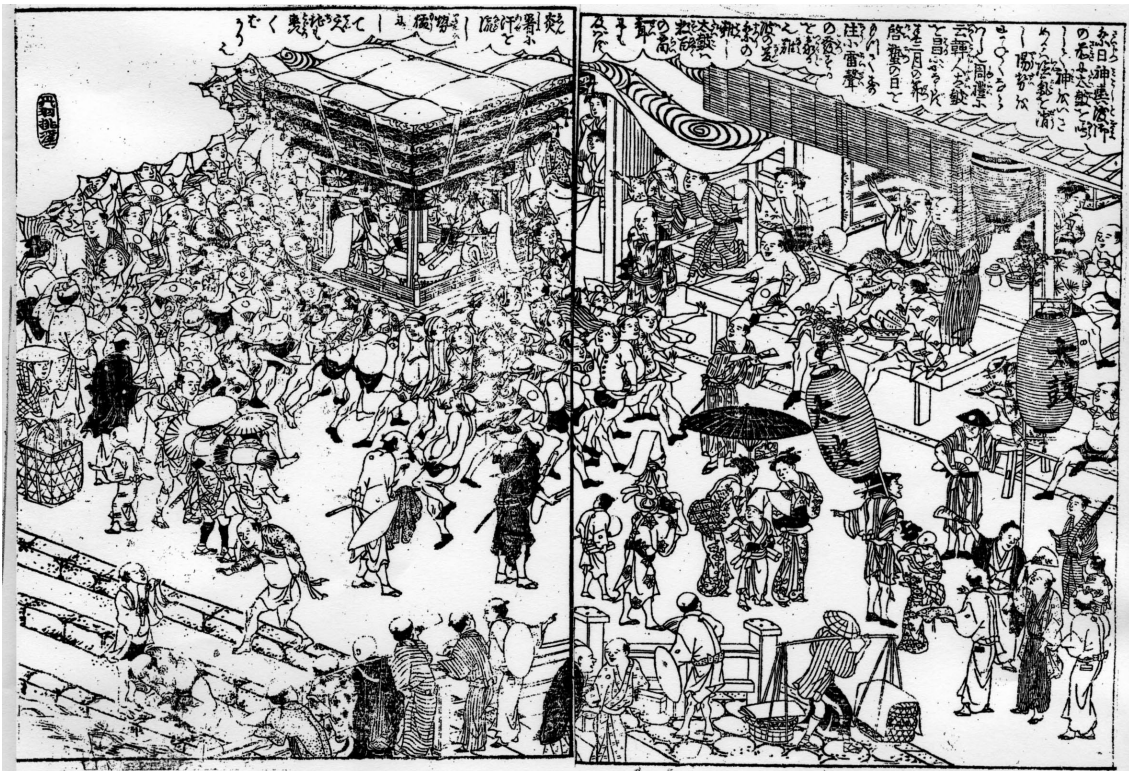


図7：難波神社 布団太鼓（『摂津名所図会』寛政10年〈1798〉刊）

けり。(中略)ややありて鼻高き面きたる猿田彦の神馬にのりてわたる。亀井隠岐守のみうちより、鎗弓もてる士を出して祭りをたすく。(後略)

廿一日 晴 晩雨又晴

仁徳天皇稲荷明神の祭なりとて、人家の軒に菊桐の紋つけたる桃灯をかかぐ。祭わたるべき大路は、埒をゆひてみだりに人を通さず。家々の前にも手すりをまうく。博労町のほとり見にまかりしに、所謂だんじりのごときものに似て、檜皮ぶきなる上に、錦の茵五ツばかり重ねしきて、下には童部ども筒長き頭巾きて、中に大きな太鼓をすへ、めぐりよりこれをうつ音かしがまし。きほひ、いさめる若きものども二三十人ばかり、此車をひかんとて、先にたちて、てうさや、ようさやと口々によぶ。そのあとより、れいの俄といふものあまた来たりしかど、ここの心をわかたねばかひなし。ややありて太鼓の音聞こゆるに、かの猿田彦の神馬に乗りてわたる。(後略)

廿二日 晴

けふは座摩の宮の祭なり。きのふみし段じり二ツは、朝の内より本町のわたりを引しと

ぞ。道修町より出せるだんじりは、前の柱に竜まきつきたり。又一ツなるは、十二浜のわたりより出せるなりとぞ。(中略)やうやう申の時前に太鼓の音きこゆ。大きな太鼓を中にすへて、左右に毛氈をもてつつみたるものをよりかかり所とし、赤き色の長き頭巾をかぶりたるわらべども太鼓をうつ。これを荷ふものは、みないさみきほへる若者ども、襷などかけし多し。高張の桃灯二つかかげたるに東浜とするせり。神官のごときもの、ちいさき櫛を手にもつ。次に猿田彦の面きて装束し、馬上にてわたる。(後略)

ちょうど『摂津名所図会』に描かれている難波神社の蒲団太鼓と坐摩神社のだんじりについてふれています。

図7は、難波神社の蒲団太鼓です。蒲団太鼓は、現在も堺のほうにたくさん残っています。堺の蒲団太鼓は四角い木枠に布団らしきもので囲っていて、中に人が入るような形になっておりますが、図7を見ますとほんとに布団を重ねているように見えます。その下を4本の柱で支えて、その中で子供が4人で四方から太鼓をたたいておりますね。



図8：坐摩神社「夏祭車楽囃子」(『摂津名所図会』寛政10年〈1798〉刊)

叩き合いになりそうな感じですけど。子供は投げ頭巾をかぶっています。この投げ頭巾は白色のようですね。天神祭の催太鼓の願人がかぶるのは赤色ですが。図7の左下隅に、雁木、階段があって川になっておりますね。これは難波神社さんですので、西横堀川か、長堀川か、そのあたりの浜(川岸)を移動しております。商家では、幕を張り、提灯を吊し、屏風を立てておりますね。そしてスイカを振舞ったりしております。蒲団太鼓を舁いている人たちは、ほとんど裸、ふんどしに足袋はだしですね。蒲団太鼓の前方を見ていただいたら、今まで太鼓を叩いていた子供に傘をさしかけて、お母さんやおばさんが、「ようやった、ようやった」という感じで、子供を世話している様子がよくわかりますね。

それから、図8は車楽、だんじりなんですね。これは坐摩さんのだんじりです。図中に書いてありますように、東堀十二浜のだんじりですね。東横堀川です。十二浜というのは、上荷船・茶船という、大阪市中の堀川を使って物資を運ぶ運搬船が、杭場といまして、それぞれの浜で仲間をつくっていたのです。人足さんたちがいて荷揚げをしたりする、そういうところですね。東横堀には12の浜があったということでしょうか。この図を見ますと、だんじりの下部、窮屈なところで太鼓やら鉦を鳴らして、上には三味線を持った人や、子供やたくさんの人が乗っていますね。前から2本の綱で引っ張って、だんじりの廻りの柵に何人も肩を入れています。商家の店の間を開け放ち、やはり幕を張って、傘を着た提灯を立てています。提灯には鷺の紋がついています。坐摩神社さんの社紋ですね。それから木戸がありまして、ここからこの町内へだんじりが突入してくるところです。やっぱり商家の軒先にずっと、防護柵をめぐらしております。現在、岸和田でもやっていますね。幕を張り、後ろに波に千鳥の屏風を立てています。その前に晴れ着をきて、御寮さんや嬢さんがすわってだんじりを見物しています。御寮さんが小さい子供を抱えています。それからやっぱりスイカを振舞って、お茶も出していますね。その木戸の内側には、やはりだんじりは暴走したりしますので怖いでしょうね、お店の前に人が集まって、怖そうな顔をした女の人や、それから

二本差しの侍も一緒になって、見物しています。

ここで私は前から疑問に思っているのですが、図8でもだんじりの下の段で、前てこ、というんですが、てこ(プレーキ棒)を握って檄を飛ばしている人が描いてありますね。この人の服装ですが、ボタンがついているシャツを着ているように見えます。図7の蒲団太鼓の先頭にも同じような服装の人がいます。以前から服飾史の専門の方にお聞きしたいと思っていたのですが、この時代にこういうシャツはあったのでしょうか。それとも輸入ものなんでしょうか。他の人はみな、はだかであったり、肩廻りから腕と背中の上部だけのシャツ(船頭さんがよく着ている)姿ですけれども。この指揮官だけは立派なボタンつきのシャツを着ています。

4. 大坂三郷に住む大阪町人にとって

夏祭りとは

今回は、船場の3神社のうち、御霊さんの祭礼図を載せておりません。その代わりに、図9に天神祭の地車宮入の図を載せましたので、天神祭の地車(だんじり)について少し説明したいと思います。

地車曳行や宮入は、神様が御旅所へお渡りになる神輿渡御のようなお宮さんの行事ではなく、氏子さんたちがお祭りを慶び盛り上げる神賑行事、神賑わいの行事です。ですから、そのお祭りを盛り上げるために各町内が出したり、市場が出したりするものです。江戸時代、天神祭は6月24日が宵宮で、25日が本宮ですが、地車が出るのは24日の宵宮です。24日夕刻より行われる地車宮入が呼び物でした。そして、25日夕刻からは船渡御が斎行されます。現在、杭全神社で地車宮入が行われておりますが、江戸時代の天神祭の地車宮入も同じような形で行われ、もっと規模が大きいものでした。氏地内の各町内や天満青物市場、堂島米市場などの市場や仲間が競い合って地車を持つわけです。前もってくじを引いて、宮入する順番を決めておきます。江戸時代、一番多くの地車が宮入したのは安永9年(1780)で、くじを引いた本番地車が71台、続いて宮入する追附地車が13台、そのほかに無宿地車なども出ていますので、この年には100台近い地車が出たと考えられます。地車

は夕刻から夜に宮入をすると、本殿のうしろに並んで、一晩中地車囃子をにぎやかに奉納して、25日の朝からは、順次もとの町内へ帰っていきます。幕末から明治には、出る地車数も激減していき、明治29年になって、たった1台残っていた天満青物市場の地車が大阪天満宮へ奉納され、今にいたっています。この地車は三ツ屋根地車と呼ばれるちょっと変わった形をしています。

町内で地車を持つといいましたが、江戸時代の大阪三郷の中にある620もの町は、一つ一つが町内共同体と呼ぶべきものです。大阪三郷内の町は、本当に狭い範囲です。たとえば、道修町が一つの町内になるのではなく、道修町一丁目・二丁目・三丁目…とそれぞれが一つの町内であって、そこにちゃんと町会所があって、町内のことを全部管轄しているわけですね。町会所には水帳と呼ばれるその町の土地台帳があります。水帳には、町内の家屋の土地の広さが、表口何間、裏行何間何尺というふうに書いてありまして、その下にその家屋敷（土地と家）の所有者の名前が、何屋何兵衛と載っています。名前の下には黒印、ハンコが押されています。大阪の場合、土地と家の持ち主がバラバラということはめったにありません。土

地と家はくっついておりまして、地主さん即ち家主さんです。もし家屋敷の所有者が諸事情により家を売ってその町内から出て行きますと、水帳に書いてある名前の上に付け紙という、新しい所有者の名前を書いた紙を上端だけ糊付けして貼ります。そうすると、持ち主がどんどん入れ替わって、上へ上へと重ねて紙を貼っていても、付け紙ですから、ペラペラめくれば前の持ち主の名前がわかります。水帳には詳しい地図が附いていまして、町内の土地構成が一目瞭然です。水帳は、町会所と惣会所と大坂町奉行所に置いてあります。水帳は、江戸時代初期、明暦3年（1657）にはじめてつくりませんが、それからだいたい40、50年ごとに作り変えていきます。最後が安政3年（1856）の水帳です。その安政3年の水帳、まず、620町の町内の町会所にあります。総会所にも保管してあって、大坂町奉行所にもあります。ですから、膨大な数の水帳があったはずですが、船場や上町、島の内は、かなり残っているのですが、天満と現在の西区のあたりはもう全滅といっていいほど水帳は残っていません。

大阪の町に住んでいる人は大阪町人ですが、大阪三郷の町内に土地と家を持ち、そこに住み、水

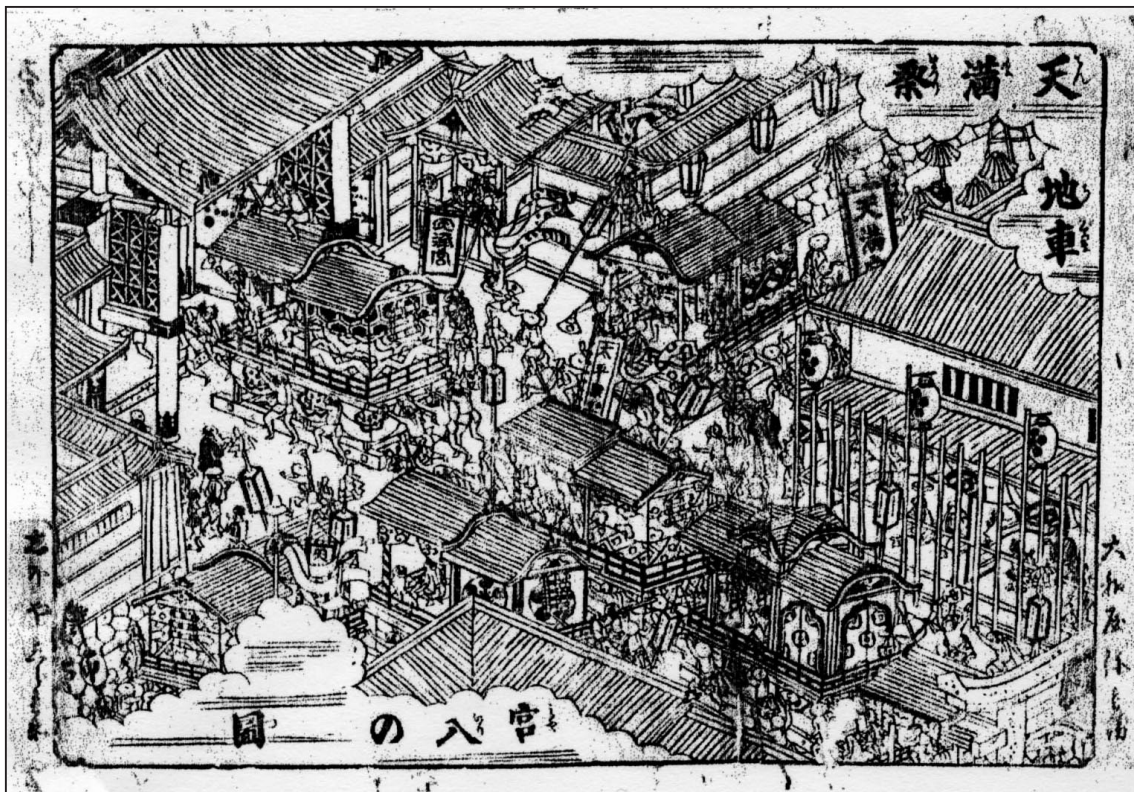


図9：「天満祭地車宮入の図」（大阪府中之島図書館蔵）

帳に名前が載ってはじめて、正式の大阪町人として認められるわけです。つまり広義の大阪町人と狭義の大阪町人があり、水帳に名前が載っている人が狭い意味での大阪町人です。水帳の名の由来については、御図帳から水帳になったのではないとも言われています。町の水帳に名前が載っている人が正式にその町の構成員として認められます。そうなりますと、その町の町年寄を選ぶ選挙権と選ばれる被選挙権を持ち、公役・町役という、いわゆる住民税を負担します。その町の一員として、分を守って、恥ずかしくない暮らしをしなければなりません。そういう風にして町内に暮らしますと、その町内はがっちりとかたまった町内共同体ですので、何をしても気を遣いながらしないといけないわけですね。お隣の家もお向かいの家もみんなわかっています。どういう暮らし向きで、どういう商売をしていて、何人子供がいて、丁稚さんや女衆おなごしさんが何人いて、など全部わかった世界です。道修町などでは、商売まで一緒になるわけですね。私ら主婦にとりましたら、こんなかなわん世界はないと思いますけど。家の中には他人の目がたくさんあって、一步外へ出ても皆が見ているという状態です。そういう中での中行事のお祭りです。だから町あげてお祭りをしないといけないのです。そのときに、ちょっとケチなことしたりしたら、あそこは商売がうまくいっていないのではないかという噂がたちますし、派手なことをしますと、分不相応であると非難されます。それは、もう大変なことです。

船場独特の呼び名、女の子だったら、「なかちゃん」「こいちゃん」。男の子だったら、「おおぼんちゃん」「なかぼんちゃん」「こぼんちゃん」。こういう呼び方をすると、名前よりもその家の何番目の子かという、その子の立場がすぐわかるわけです。「〇〇家のこいちゃん」といえば、その家のお嬢ちゃん、ということです。そういう世界ですね。家の中でも外でも他人の目がいっぱいあるのですから、それはもう行儀の悪いことはできませんね。きちんと分を守ってきっちり生活していけないといけません。

そんな世界で、氏神さんのお祭りというのは、お正月について大切な行事です。同じ氏神さんの氏地の町々、何十町、あるいは、百を超える町々

が、全部一緒になって祝うお祭りです。

それから各家でいうと先祖の祭り、法事というのが非常に大事になってくるわけです。幕末にいくにつれて、そのお家が何代も続きますと、初代からずっと続いて、法事ばかりしているような状態になってきます。冠婚葬祭でも結婚式などは一回ですみますが、もし当主が亡くなられたら、千日前の千日墓所まで行列を作って行くお葬式からはじまり、葬儀の後の仕上（しあげ）、初七日、二七日、三七日、四七日、五七日、六七日、七七日、で四十九日ですね。それから、百か日があって、一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌、二十五回忌、三十三回忌、五十回忌、百回忌と、延々と続いていくわけです。それが当主夫妻であまり差がなく、御寮人さんのお葬式、法事もきちんとやっております。そういう風な法事だけの暮らしになっていくわけですね。その法事のたびに親戚一統、商売仲間、町内の人々をお呼びして精進料理を出さないといけません。ですから各町々に仕出料理屋があります。それらの仕出料理屋は八百屋何々という名前が多いので、おそらくもともとは八百屋だったのでしょう。大阪の商家の法事では、仕出料理屋の料理人が天満の市場に行って材料を整えて、法事を行う家の台所に来て、その家の家宝のお道具や器に盛り付けして、お客さんにお出しする。料理は一人前くらいで請け負っているわけです。さらに法事は自分の家だけにはとどまりません。我が家の法事にお呼びした人に呼ばれて行くことも多いですから、幕末のころになると月のうち何日も法事の日（精進日と言っていたようです）が回ってきます。

他人の目がたくさんあって、非常にきっちりとしたルールで動いていて、そうした暮らしが何百年単位で続いてきて、大阪の生活文化が成立していくわけです。もちろん、先ほど水帳についてふれましたように、大坂三郷内の何処かの町内に家屋敷を所持して住んでいる狭義の大阪町人の栄枯盛衰ははげしく、町内の構成員は入れ替わりを繰り返したのですが、全体として見るとそういう暮らしぶりだったのです。それが戦前までは続いてきたわけです。船場の言葉もそうですね。そういう暮らしで培われてきた言葉で、商売人の言葉ですから、相手に気を悪くさせないように気を遣

い、人間関係がうまく行くようにユーモアのセンスに富み、非常に発達した言葉です。その船場言葉も滅んでしまったのが残念でございます。

江戸時代の大阪町人、狭い意味での大阪町人にとりまして、氏神さんのお祭りを盛大にしかも分相応にお祝いするということは、自分の立場、ステータスを守るといった意味があったのですね。

※商家の法事については、私の曾祖母の実家の史料を翻刻して出版しました『助松屋文書』（昭和53年刊）によりました。

近江晴子（大阪天満宮文化研究所 研究員）

奈良女子大学文学部卒業。昭和59年から大阪天満宮の歴史の編纂に従事。大阪天満宮の歴史と大阪の歴史を主な研究テーマとし、主要論文として「大阪天満宮の氏地の拡大と坐摩神社との相論」（『大阪天満宮史の研究』平成3年、思文閣出版）、「大阪天満宮の境内地・社地における旧大名家屋敷について」（『大阪天満宮史の研究』第2集、平成5年、思文閣出版）、「大阪天満宮の講について 一享保9年～慶応2年一」（『大阪の歴史』54号、平成11年）などがある。